

《 海外レポート 》

良心をもって世を照らす

—— アーモスト大学留学報告 ——

安 野 伊万里

(同志社大学社会学部社会福祉学科卒業 (2022)・Amherst College 卒業 (2024))

はじめに

2022年に同志社大学社会学部社会福祉学科を卒業した安野伊万里と申します。卒業後半年間、大学院社会福祉学専攻にも在籍していました。2022年9月から2024年5月までの間、同志社新島スカラーとして新島襄ゆかりのアーモスト大学（アメリカ合衆国）に派遣され、学びの機会を与えられました。このレポートでは、アーモスト大学での生活の様子について、およびアメリカで私が実施した平和プロジェクトについて紹介します。

アーモストの地へ

アーモスト大学は、1954年より同志社大学からの3年次編入生を受け入れています。2年に1度募集されていた「新島スカラシップ」とは別に、1984年より同志社の支援により編入生を派遣する「同志社新島スカラシップ」がはじまり、事実上毎年1名が同志社系列の大学・大学院からアーモスト大学に派遣されています。私は同志社大学1年次に立て看板でこの編入制度について知り、応募基準を満たすための英語力の特訓を始めました。特に、国際専修コース生としてILA (Institute for Liberal Arts) 学部の科目（留学生などとともに英語で実施）の履修を通して力をつけました。被爆者の研究をしたいと思っていた私は、海外の大学院への進学を視野に入れていたため、卒業生に大学院進学者の多いアーモスト大学での経験が役に立つだろうと考え、応募しました。

アーモストでの生活

アーモスト大学は東海岸ボストンから車で2時間半ほどで、マサチューセッツ州西部の人口4万人ほどの町（Town of Amherst）にあります。アーモスト町はパイオニアバレーという谷にあり、周りを山に囲まれています。ハイキングはもちろん、キャンプ、昔の線路を改修したサイクリングロードもあります。近くにはコネチカット川が流れており、冬は川の支流の一部でスケートができ



アーモスト大学の街中にある公園で皆既日食を待っている地元の人々。

る場所もあります。前期（9月～12月）は緑生い茂る夏から、紅葉で染まる秋のキャンパス、氷点下の日々が続く冬を体験することができます。反対に後期（2月～5月）は雪が溶け緑が戻ってくる様子、街の人々が日光浴のために広場に戻ってくる様子を観察することができます。4月後半や5月の暖かい日には、外の芝生で円になって授業を行うクラスもよくあります。キャンパスは野生動物や自然との距離が近く、年中リスが走り回り、たまにウサギやキツネにも出会えます。熊の赤ちゃんの目撃情報もチラホラ。寮には冷房がなく夏の間は大変ですが、暖房設備は効きすぎるほどで、建物内は一年中半袖で過ごせます。

キャンパスには、授業を受ける建物、教授たちの研究室、学生寮が混在しています。20分ほど歩くとアーモスト大学の所有する農園があり、食堂で提供する野菜（トマトやキュウリ、かぼちゃなど）の畑やお花畑などがあります。新島襄の肖像画がある Johnson Chapel は、学生から親しみを込めて J-Chap と呼ばれ、昼間は1時間ごとに時を刻む鐘が鳴ります。その北隣には新島襄が住んでいたと言い伝えられる North Hall という寮があり、今では1年生寮の一部になっています。

食堂は大学に1つだけあり、1日3度、ほとんどすべての学生、教職員が集います。お昼には学生と食事をともにするマイケル・エリオット学長もよく見かけました。多国籍・多宗教の利用者に配慮し、ハラル、ヴィーガン、アレルギーなどに対応したメニューが揃っていました。サラダや果物、デザート、コーヒーなどは食堂の空いている時間はいつでもアクセスすることができ、授業合間にカフェとして利用する学生も多くいました。また、フットボールやホッケー、サッカーの試合などの大きなイベントがあるときは、職員と学生が一緒になってテレビのある部屋で観戦していました。



毎年2月に開催されるフットボールの試合「スーパーボウル」を観戦する学生と食堂の職員。



4月、好天のある日、青空授業するクラス。
チャペル右隣は新島襄が住んでいた North Hall。

学生数は全学年で2000人ほどで、合格率は7%ほどだそうです。日本からの留学生は全体で7-8名でした。日本語学科があり、日本についての研究者を目指す人とも出会いました。私が4年次には、日本語を話す学生と日本語学習者が一緒になってご飯を食べるイベント「日本語テーブル」を主催しました。アーモストはもともと白人男性が中心の大学でしたが、1970年代に男女共学になり、今ではエスニシティ・宗教・セクシュアリティ・社会階層のいろんな要素が混

ざったとてもリベラルな環境になりつつあります。チャペルは、キリスト教だけを奨励しないことを心がけており、十字架などはありませんでした。どんな宗教でも、信条でも受け入れられる環境でした。それぞれの宗教においてチャプレンがおり、仏教、カトリック、プロテスタント、ユダヤ教、イスラム教、ヒンドゥー教、ヒューマニスト（特定の宗教には属さない人道主義者）の訓練を受けたチャプレンと学生スタッフが交流する機会、カウンセリングを受けることもできます。

アーモストでのまなび

アーモスト大学はリベラルアーツ（教養課程）の大学で、専攻にかかわらず様々な授業を履修できます（オープンカリキュラム）。私は文化人類学を専攻し、理論やエスノグラフィーを読む授業、医療人類学、公害の人類学などを専門科目として履修しました。その他には、アメリカンスタディーズ、地学、統計、手話、歴史、ビーズ、ギターの授業なども履修しました。他にも、自分でワインを作る化学の授業（たまに先生がワイングラス片手に授業も！）、近くの山の動物の足跡やフンから生態系を学ぶ環境学の授業などが開講されており、フィールドとアカデミアの世界を繋げることを重視していた先生が多いように感じました。



ビーズの授業。全員でアルファベットを作り、アメリカのフェミニスト、ベル・フックを引用。

どの授業にも共通するのが、課題量（Reading や Writing）の多さと学生の授業内発言頻度の高さです。ある人文系の授業では、1週間で1冊の本（400ページほど）を課され、書評まで



『アジアにおける日本帝国』という歴史の授業の課題論文と本。論文は予めコピーされ製本・配布されることが多い。

書いてこななければならないこともありました。授業では、事前に読んだ本や論文について全員でディスカッションをします。私の英語力と思考力のレベルでは、日々の課題や授業内のディスカッションは大きな壁でした。しかし、同じ授業をとる友達に論文の読み方を教えてもらったり、授業担当の先生のオフィスアワーに通ってどうにかついていこうとしました。学術面でのサポート体制は整っており、レポートやプレゼンテーションを作る時に助言や見直しを手伝ってくれる Writing Center のスタッフとの面談、先生のオフィスアワーに通えば、どうにかして助けてもらえます。

学生の様子

リベラルアーツ教育といえど、昨今の理系偏向の波はアーモストにも届いており、数学、経済学などが人気でした。特に留学生は、卒業後アメリカで就職することを念頭に、就職へのつながりやすさ、ビザの取りやすさをメジャーの決め手にする人を多く見かけました。どの専攻においても、卒業後の進路や夢を明確にもっている人が多く、夢に向かって継続的に努力をしている人が多くいました。コメディアンを目指す人、ミュージシャン、ダンサー、医療系専門職や数学や文学の研究者を目指す人たちと出会いました。彼／女たちは、授業に積極的に参加することはもちろんのこと、独自に論文を書いたり、研究・開発したり、作曲したり、本を出版したりと、学んだことや好きなことを自分らしい方法で表現することに長けている人に出会いました。そんな学生たちのバイタリティと行動力に驚く毎日でした。

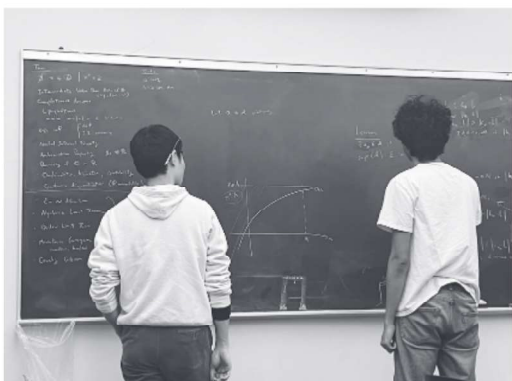
4年次の最後の学期に出会い、とても親しくなった Phillip は、生物学と数学を専攻する学生でした。彼は、専攻に関係する研究、卒業論文に加えて、2つの授業の TA として働き、生徒会活動、サークル活動、新しいサークル (Quantitative Computational Biology Club : 定量計算生物学クラブ) を立ち上げたり、アートや音楽も情熱的に取り組む人でした。多くのことを同時にこなし、成果もきちんと出すかわら、友人関係や遊びも充実させる、ザ・アーモストな人でした。アーモストでは、学生がやりたいと思うことをとことん尊重してサポートする体制が整っており、Phillip のように情熱をもって学業・学校生活に向き合う学生がのびのびと活動や表現の幅を広げていける文化と資源がありました。



Phillip さん。休みの日に絵の書き方を教えてくれた。

もちろん、学生の勉強に対する考え方も様々で、アーモストの「ガリ勉」文化、および卒業後多くの学生が金融業界に就職する現状に反抗する人もいました。彼女たちの考え方では、学生生活はただ与えられた課題をこなすことではなく、強迫的にインターンシップに応募することでもなく、今ここにあるコミュニティの中で人とどうつながることができるか、倫理的な人生とは何か、という問いに応答することこそが学生生活における優先事項でした。彼女たちの実践・問いは、リベラルアーツ課程で求められる学生像の核心をついたものだと感じました。

アーモストでできた友人たちには、会話を通して新しいことを学ぶことが好きな人が多く、毎回のごとく、食事と一緒にテーブルで座った人たちと深い話をしたり、大変な課題の量をこなす自分たちをねぎらったり、ときには白熱した議論になったりしました。食堂や図書館、理系研究室や実験室が集まるサイエンスセンターで日々起る会話では、ウィットに富み、自分の専攻の専門的な知識はもちろん、隣接領域の学問、あるいは趣味で勉強していることなどで見聞きしたことをもとに話がすすむため、メジャーの違う人たちとの会話はとても勉強になりました。ラジオのダイアルを回して異なる放送局の電波を拾うように、社会的考え方、数学的考え方、経済



深夜まで議論を続ける経済学専攻の2人。

学的考え方など、学問によって異なる世界の解像度に波長を合わせる感覚を覚えました。リベラルアーツ教育の醍醐味は、様々な学問を志す学生との交流を通して知識の幅を広げることはもちろん、自らの学問的個性も強めることができることだと思います。異なる専攻・学問を志す学生と頻繁に混ざること、これまで自分が勉強してきた社会福祉学や文化人類学の芯となる考え方は何か、他学問に応用できるのか、会話を通して考えることが多くありました。

学生コミュニティのポリティクス

多様な人が集まる環境になりつつあるアーモスト大学でも、コンフリクトは存在していました。特に、アスリート（体育会系）とそうでない人たちの分断は大きく、学生間の会話でよく登場する話題でした。その問題の根端には、アメリカの入試制度において、大学運営側と伝統的な富裕層との繋がりが強いことが挙げられます。アスリートとして推薦で入学した学生は、比較的恵まれた家庭で育った人が多く、他の学生よりも「特権」をもっていることをほとんどの学生が認識していました。アーモスト大学はレガシー制度（親族が関係者の場合、合格をもらいやすくなる）を早々に終了した大学ではあるものの、誰が特権をより多くもち、誰がそうでないのか、よりわかりやすい指標となったのがアスリートとしてのステータス、体育会への所属でした。その分断は日常的なレベルで可視化されていました。例えば、食堂のどの部屋のどのテーブルでご飯を食べるか、どのパーティに参加するか、どこに寮に住むか、など、小さい大学ならではのコミュニティの境界線がありました。マサチューセッツ州という、民主党を常に支持してきた歴史をもつ州にある、かなり先進的なリベラルアーツの大学においても、社会階層、エスニシティ、国籍など、どのような「特権」をもっているかによって棲み分けがなされる側面もあったキャンパスは、アメリカ社会の縮図のようでもありました。

そのような分断の問題を抱えつつも、裕福とはいえない家庭で育った学生を支える制度の整備にもアーモスト大学は力を入れていました。2010年代より、学生の強い要望を受け、様々な学生のニーズやアイデンティティに配慮した学生支援室（Office of Identity and Cultural Resources）が設置されました。ファーストジェネレーション（親が大学教育を受けていない）や低収入家庭の学生を「FLI（First Generation and Low Income）学生」と呼び、



私が働いていた Book and Plow Farm（農園）で収穫された野菜。このあと食堂まで運ぶ。

編入生や退役軍人の学生とともにサポートする、CARC (Class and Accessibility Resource Center) の他、LGBTQI+の学生のピアサポート、ワークショップなどを担当する QRC (Queer Resource Center)、女性やジェンダーに関する啓発活動を行う WGC (Women and Gender Resource Center)、POC (People of Color=肌に色のある人) の学生を支援する MRC (Multicultural Resource Center) などがありました。他にも、学生のウェルビーイングや宗教・スピリチュアリティの実践をサポートするセンターなどもありました。

アーモストの構成員

学内ではアルバイトの機会が設けられており、リサーチアシスタント、農場、用務員、食堂など、私も色んなところでアルバイトを経験しました。特に印象に残ったのが、学内にひとつだけある食堂 (Valentine Hall) と、ゴミ収集や施設の施錠を担当する (Custodial Office) で働いていたときに出会った人々です。もちろんアメリカで生まれ育った人も働いていましたが (特に管理職)、そのほとんどの構成員がラテンアメリカや中東、東南アジアからの移民でした。カンボジア内戦の難民として1970年代に渡米した方や、中学生のころに1人でメキシコとの国境を歩いて渡ってきた青年などが正職員として働いていました。父親が第二次世界大戦中サイパンで旧日本軍と戦い、彼自身も退役軍人である同僚もいました。そのような同僚と一緒に働き、仕事の合間に会話をすることで、アメリカという場所の地理的、政治的な特殊性を目の当たりにしました。伝統的に裕福で社会階層の上層からやってくる学生たちの大学生活・寮生活が成り立っているのは、毎日大量の食事をつくり、大量のゴミを処理する方々のおかげでしたが、彼／女たちは早朝に、キッチンの裏側、あるいは地下の用務員室で働いているため、姿がみられることはあまりなく、学生から感謝される機会はそう多くはありませんでした。一般の学生にとって、彼／女ら用務員、食堂のスタッフの姿やストーリーは見えているようであまり知られていませんでした。

しかし、彼／女たちには彼／女たちのアーモストコミュニティがあり、アーモストという職場を愛していました。煌びやかなアーモスト大学の「裏側」で働くスタッフたちは、彼／女たちならではのアーモストとの関わりがあり、世界の見え方がありました。ときどき、ある用務員のライフヒストリーが学生新聞に取り上げられたり、食堂のスタッフが学生と仲良く話したりという、交流の様子も見られました。毎年、卒業生とともに大学の職員 (食堂職員や用務員、教員など) が「名誉卒業生」として表彰されるイベントもありました。



冬のアーモスト。2023年2月にはマイナス24度を記録。気候変動が進み、今は昔ほど雪は降らない。

平和プロジェクト（2023年夏休み）

3年次の春には Davis Foundation が主催する「100 Projects for Peace」よりいただいた奨学金10,000ドルを使い、アーモスト大学の代表として平和問題に関するプロジェクトを企画・実施しました。これは主にアメリカの学部生が、自分で立ち上げたプロジェクトを通して世界中の社会問題の解決を試みるもので、アメリカの長い夏休み期間（5月～8月）を利用して実行します。私は「Representation of Intergenerational Trauma: Narratives of Second Generation Nuclear Survivor（世代を超えたトラウマの表象：核被害者2世の語り）」というプロジェクトタイトルのもと、日本とアメリカの核産業によって被害を受けた方々に会い、インタビューをおこないました。日本では、長崎原爆の被爆2世の方約10名にライフヒストリーをお聞きし、アメリカでは、ナバホ先住民居留地、ニューメキシコ州、コロラド州、ユタ州をまわり、ウラン採掘労働経験者および周辺住民、核実験の風下住民（核実験による放射性物質が降下した地域の住民）の話を聞くため会いに行きました。

日本（長崎・京都）の被爆2世

長崎および京都では長崎原爆被害者の2世の方々にお会いし、これまでの人生、被爆者である親との関わり、被爆2世としてのアイデンティティなどについてお聞きしました。被爆2世というカテゴリは、「生物学上の親が厚生労働省の定める原爆被災者である」という大まかな定義のもと、補償制度もなく、社会的にも認識が低い現状です。被爆2世というひとつの集団であって、被爆の捉え方、2世というアイデンティティの受け入れ方、被爆者運動との関わり方は多様でした。ガンを患った方、両親・きょうだいを放射線に起因するであろう疾患で亡くした方、被爆に振り回された人生だと感じる方や、原爆被災者たちの霊が見えるようになった方などとお会いしました。そのことから、被爆2世の経験は病気への罹患だけでなく、病気の原因が「ひょっとしたら」放射能に起因するかもしれないという不安、社会的スティグマ、スピリチュアルな側面もあることがわかりました。

興味深かったのは、行政の定めた「被爆者」、それに派生するようにできた「被爆2世」というカテゴリの曖昧さ、線引きの理不尽さと直面しながら生きた方とお会いできたことです。彼の父親は被爆後1ヶ月で故郷長崎に戻り、彼も、爆風によって傾いた家で生まれ育ちました。幼い頃に大病を患い、晩年もガンに苦しんだ彼は、父親が長崎に入市したのが2週間遅いという理由で、被爆2世であるとは法的にも社会的にも認められず、彼の病気も被爆に起因するものとは認められませんでした。「もしかしたら放射能のせいかもしれない」という不安を抱えて生きてきた彼の語りは、補償制度がいかに生物医学的な身体と癒着しているか、および原爆がもたらす影響がはかりしれないものであることを証明していました。



長崎市平和町にあるヒバクシャ・コミュニティ・センター。2世の方とはここで会いました。

アメリカの核被害者

核兵器を日本に投下したアメリカ本国の市民たちも、長い間核産業の犠牲になってきました。その皺寄せは、いつも決まって脆弱な立場に置かれた人々、これまでも多くの苦難を押し付けられてきた人々の身に降りかかります。アメリカでは、多くの先住民たちの土地が核兵器の原料となるウランの採掘場、生産工場、あるいは廃棄場になってきました。1990年、RECA (Radiation Exposure Compensation Act=放射線被曝補償制度) が制定されたものの、「放射線に起因する疾患」と認められるためのハードルは高く、対象者もほんの一握りでした。多くの被曝者や支援者の抗議があったにも関わらず、この RECA は2024年6月に期限切れとなりました。



ニューメキシコ州アルバカーキにある国立原子力博物館。ニューメキシコ州で実施された人類初の核実験 Trinity Test の写真の横に広島に投下されたウラン型爆弾 Little Boy、その横には長崎に投下されたプルトニウム型爆弾 Fat Man の模型が展示されている。

ウラン採掘による被曝者（ナバホネーション・ニューメキシコ州）

日本でのインタビュー活動のあと、アメリカ南西部に渡りました。ニューメキシコの中心都市 Albuquerque から西に3時間ほど運転、Gallup という街に1泊、翌日ひたすら北にすすむと Churchrock という町に着きます。町といっても、乾いた草原に大きな岩が並び、ぽつりぽつりと民家と鉱山産業の工場跡地などが建っている場所です。この場所はナバホ先住民の人たちが長い間守り継いできた土地でした。1960年代、天然ウランが採れるこの場所を利用したアメリカ政府は、冷戦の緊張度が高まるにつれ、核兵器の生産・製造に力を入れるようになりました。その



2023年7月16日に行われたウラン流出事故のデモ。

核兵器の原料となったのが、Churchrock をはじめとした多くの先住民の居留地で採掘されたウランでした。ナバホネーションはアメリカ政府に土地の使用を許可し、ウラン採掘業者が建設を始めました。現地のナバホの人々も多く労働に駆り出され、坑内の前線で働いた方が多くいました。その労働環境は、ウランによる放射能被害を無視し、安全対策もずさんでした。お昼ごはんを放射性物質のついた手で食べたり、ウラン鉱山で着用した服や靴のまま家に帰り、家族も被曝をしたりと、放射能が健康に被害を与えるものであるという知識もまったくないまま、採掘作業が行われていたそうです。その結果、多くの鉱山労働者がガンになり、肺を痛め、病を患いました。1979年7月16日、この Churchrock では大規模な

放射性物質流出事故があり、周辺地域がウランによって汚染されました。事故を起こした企業は事実を隠蔽し、周辺住民に危険が知らされたのが遅れたのはもちろん、アメリカ国民は知る由もありませんでした。全米で突出して貧しい州と言われるニューメキシコ州の先住民の土地で何が起きているのか、誰が苦しんでいるのか、気に留めた人はほとんどいませんでした。

ここで出会ったのは Edith さんと彼女の弟の Bradley さんです。Edith さんは Churchrock 出身のナバホ先住民の方で、ウラン鉱山で6年ほど働いていました。鉱山の壁の硬度や鉱石の質を調査する仕事をしていた Edith さんは、その過程でたくさんの被曝をしました。彼女の家族もまた同じように被曝し、何人かはガンで亡くなりました。Edith さんの証言をお聞きしたあと、弟の Bradley さんが集会所の隣にそびえ立つウラン採掘のあとと取り残された放射性廃棄物の近くに連れて行ってくれました。アメリカ政府が設置した簡易的な柵をくぐり少し登ると、廃棄物の山を一望できました。このウラン採掘のゴミ山と Edith さんや Bradley さんが暮らす家を隔てるものは、この頼りないフェンスだけでした。羊や犬はフェンスを軽々と飛び越えて遊び、雨水も流れてきます。汚染された土で育った植物の種子は除染された土地で芽を出します。地元の人たちも、この丘へは、散歩によくでかけるそうです。ウランにとって、フェンスや州境は壁ではありません。軽々と飛び越え、生物、植物、水、空気、人々の身体に入り込みます。遮るものは何もない堆積場に何十年も放置されたウランは Churchrock の住民たちの身体と生活をゆっくりと蝕んでいきました。



白っぽい丘が放射性廃棄物。近くには民家。



汚染された山を案内してくれた Bradley さん。

核実験の被曝者（コロラド州・ユタ州）

ユタ州では、州都 Salt Lake City より南西に5時間ほど走ったところにある Cedar City に向かい、Downwinders（核実験の風下住民）へのインタビューを行いました。「小学校では核実験について、あるいはその危険性について学んだことは一度もなかった」「セシウムの分解を助ける菓が学校で配られたり、実験のキノコ雲を校庭から全員で見た」などの証言を聞きました。家族をガンでなくしたこと、地域の中でも、放射能の被害は同心円上に起こるのではなく、地形、地質、雨水の集まり方といった土地の特徴によって偏り（Hotspot）があったことなどを教えてもらいました。

Downwinders のひとりの Zelda さんは、産んだ娘の1人に先天性の障害がありました。ある



自費出版した本を大事にかかえる Zelda さん。Salt Lake City のご自宅にて。

日雑誌を読んでいてたまたま見つけたのが、放射能の影響で頭を2つもって生まれた豚の写真でした。核実験場からそれほど遠くない場所で育ったことを知っていた Zelda さんは、生まれつき目をもたなかった娘さんと雑誌に出ていた動物たちとに共通点を見出しました。娘さんは早くに亡くなってしまいましたが、彼女の人生や、母としての経験を『Elaine, What Happened? (エレイン、何が起きたの?)』という本にし、思いを綴りました。

Salt Lake City にあるユタ大学マリOTT図書館には、Downwinders の証言アーカイブがあり、そのアーカイブのチームにも会いに行きました。Downwinders たちの証言インタビューをビデオ、音声で記録すること、それらのデータをシステム上に公開する上での工夫や苦勞について教えてもらいました。ユタ州は、州都は発展しているものの、Cedar City などの地方では圧倒的な車社会で、僻地ゆえ情報へのアクセスも難しく、自分が Downwinders であることを知らない人が多くいました。このような方々への接触を図るために、図書館でインタビューの募集をしたり、口コミを利用したりといった工夫をしたそうです。

アーモストからノルウェーへ

アーモスト大学を2024年5月に卒業後、ノルウェーのオスロ大学のインターナショナルサマースクールに参加し、修士レベルの平和学を専攻しました。PRIO (Peace Research Institute Oslo) という平和・紛争研究所の研究者から毎日講義を受け、平和や国際関係を専攻する学生や NGO・国連の職員とともに6週間勉強しました。講義には平和学に関係する様々なトピックがあり、戦争や平和の定義、量的・質的研究をはじめとして、中東・ウクライナ・ロシア・ラテンアメリカの紛争の状況や、女性への暴力、マシンラーニングを使った戦禍の予想技術、AI やドローンの役割などについて学びました。クラスには現役国連職員や NGO、シンクタンクのリサーチャー、修士や博士課程の学生などがおり、平和や紛争についての知識がどうキャリアにつながるのか、クラスメイトからも学ぶことができました。



サマースクールの最後にはグループプレゼンテーション。トルコのクルディスタン労働者党が、和平交渉時、メディアでどう扱われたかを量的調査を通して分析した。

オスロ大学の学部生や修士・博士課程の学生は、敷地内にパレスチナ連帯のためのキャンプをたてており、大学の学長もときどき訪れるほど、学生や教職員から認知された活動でした。私もノルウェー滞在中数日間はキャンプに泊まらせてもらい、パレスチナの現状、これまでの歴史に

ついて、参加している学生から教えてもらいました。ガザや西岸地区から移民としてノルウェーに渡ってきた人もおり、不安や日々更新される状況の悪化に身も心も削られると吐露していました。



オスロ大学のメイン広場に設置されたパレスチナ連帯キャンプ。毎日多くの人足が止まり、対話の場が生まれていた。

ニューヨークのコロンビア大学に代表されるように、アメリカの多くの大学では、キャンプを設置した学生たちが警察により強制的に退去させられ、逮捕される事件が相次ぎました。アーモスト大学の隣の大学、マサチューセッツ大学アーモスト校でも大規模な逮捕事件（学生＋教職員）があり、私も逮捕現場を目撃しました。オスロ大学では半年以上もキャンプが認められており、完全に大学当局と意見が合致するわけではないものの、夜間の施設利用が許可されたり、大学側がキャンプ場に簡易トイレを設置したりと、友好的な関係が続いていました。平和の定義や戦場におけるルール

などを大学で学びながら、現実には国や一部の利権者の利害関係や営利目的の行動によって多くの人の命がないがしろにされることが日常化していることを目の当たりにし、非常にもどかしさを覚えました。ただ、アメリカでもノルウェーでも、そして日本でも、地道に戦争に反対し、核兵器に反対する活動をしている人たちがいることは一筋の光です。

おわりに

同志社大学社会福祉学科での4.5年間、アーモスト大学での2年間、さらにノルウェーで過ごした夏を通し、たくさんの刺激を受け、成長することができたと思います。自由に物事を学び、仲間や教授たちと話し合えるアーモストの環境は、とても貴重で、確実に私の力になりました。また、多くの社会問題を知り、当事者たちと出会い、私たちの住む世界が抱える問題の根深さと複雑さを学びました。その中でも、問題に真正面に立ち向かい、正義を取り戻そうとする日本の被爆者たち、アメリカおよび世界の被爆者たち、および周りにいる支援者や研究者たちと出会えたことは私の原動力になりました。このような経験をさせてもらったからこそ、これからも、社会の不正義に立ち向かっている人々の力になれるような活動をしたいと思っています。同志社大学で学んだ「良心」の眼差しを、アーモスト大学の「Terras Irradiant（世を照らす人であれ）」の精神とともに培い、今後の活動・研究の糧としていきたいです。



アーモスト大学卒業式。Johnson Chapel の新島襄肖像画前にて。卒業生は杖をもらう伝統がある。